



金時鐘の日本語表現：『猪飼野詩集』を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅見, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005081

金時鐘の日本語表現

——『猪飼野詩集』を中心に——

浅見洋子

序

植民地時代は朝鮮に生まれながらも日本の教育によって皇國少年として育ち、解放後もなお〈在日〉として「自分の國を植民地として虐げた國で、生活を余儀なくされている」金時鐘にとつて、日本語は「口惜しさを抱えて使う」言葉としてある。

それにも関わらず、金時鐘は日本語による表現を手放そうとせず、詩を書き続けている。それは、思考秩序が日本語で形成されていること以上に、日本語による表現を通して歪んだ自分を作り上げた日本に報復を遂げ、自己回復を果たそうとする意識が強いからである。

金時鐘の詩において、金時鐘固有の体験、民族の記憶を背景としたおびただしい死者は、初期の詩から現在に至るまで一貫して描かれるモチーフとしてある。金時鐘は第三詩集『新潟』²⁾で、

忘却の淵に沈んだ死者の声を、
「風は／海の／深い／溜息から
／洩れる。」とうたった。その上で、金時鐘は沈没した浮島丸³⁾を
爆破させ、海底に閉じこめられた死者の解放を試みている。

穴だあ！／出口だ！／俺の獲物だあ！／うっ積した／塵を
噴き上げ／覗きこんだ奴の／首をもかさらつた／骨の疾
走が／囲いを抜ける！

ここで、白骨となった無数の死者は、海底から飛び出し、生きた人間のもとへと送りこまれる。このように暗闇に閉ざされた死者の声をとらえた金時鐘の『新潟』以降の課題は、個々の顔を失い、塊でしか存在しようのない死者の個別の物語を一つ一つ掘り起こしていくことだったといえよう。『新潟』において、海の底に「沈み」、「ただよい」、「うずくまっている」と表現された死者は、次の『猪飼野詩集』では、猪飼野に生きる〈在日〉の生活の場に置かれている。死者のさびしい魂は、死者の記憶

と共に生きる生者のそばで、再びその生の痕跡を刻みはじめるのである。このような（死）の描かれ方に注目することで、死者の記憶を忘却の淵に追いやつてきた近代日本に対する金時鐘の批評意識をとらえることができるのではないか。⁽⁴⁾ 本稿では、一九七〇年代を金時鐘の表現確立において核心を成す時期として捉え、その詩と思想の考察を通して、同時代の時代状況の中で金時鐘の日本語が持ち得た可能性を探りたい。

なお、論文中、民族の総称として朝鮮人、在日朝鮮人（以下、在日）、国家の名称として朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）、大韓民国（以下、韓国）を用いる。⁽⁵⁾

I 歴史と伝説

『猪飼野詩集』は、一九七八年一〇月に東京新聞出版局から刊行された長篇詩集で、一九七五年二月から一九七七年二月まで『季刊三千里』に「長篇詩 猪飼野詩集」として連載された詩が大半を占める。⁽⁶⁾ 初出にあたるこの連載版では、冒頭に「始まる伝統」、二回目以降は「始まる伝説」という副題が付されている。⁽⁷⁾ 国民的歴史理解があるとすれば、この「伝統」・「伝説」という言葉には、そのような歴史に記述されることのなかった者たちの生の痕跡を、歴史とは違った文脈で刻もうとする金時

鐘の思いがこめられているのだろう。歴史の域外に置かれ、日々の生活を生きることと権力の暴力に抗っていた民衆の声は、『猪飼野詩集』で「伝説」という形をとって紡がれていく。その語りの場として、金時鐘は大阪にある日本最大の在日朝鮮人居留地、猪飼野に焦点を当てた。猪飼野は、日本の中の異郷として、「行政府から出された『正史』」には、その存在が記述、記録されることがほとんどなかった⁽⁸⁾ 町である。日本人の意識の外に放置されてきた猪飼野は、詩集の冒頭で「見えない町」として次のようにうたわれている。

なくても ある町。／そのままのままで／なくなっている
町。／電車はなるだけ 遠くを走り／火葬場だけは すぐ
そこに／しつらえてある町。／みんなが知っていて／地図
になく／地図にないから／日本でなく／日本でないから／
消えててもよく／どうでもいいから／気ままなものよ。

（見えない町）

「どうだ、来てみないか？／もちろん 標識つてなものはないやしない。／たぐってくるのが 条件だ。」「大阪のどこかっ？／じゃあ、イクノといえど得心するかい？」「知っているだろう？／あの抜けおちた 銭はげのような居場所／いたはずのうなじが 見えてないだけなんだ。」という畳みかけるような

挑発によって、読者は徐々に猪飼野へと誘いこまれる。

「にぎにぎしくて／あけつびろげで」、「土着の古さで／のしかかり」、「始まるうものなら／三日三晩。／鉦と太鼓に叩かれる町。／今でも巫人が狂う／原色の町」。猪飼野で生まれ育った金石範が、「そこは朝鮮人の生活の原形が、少しも損われずに、ふしぎに力強い生活力の營為に支えつづけられながら、この何十年のあいだ存続してきたところ」だと述べるように、猪飼野には〈在日〉が異郷で培ってきた「伝統」が生き生きと根づいているのである。詩集冒頭に置かれた「見えない町」は、「夜目にもくつきりにじんでいて／出会えない人には／見えもしない／はるかな日本の／朝鮮の町。」⁽¹⁰⁾で終わり、このあと、猪飼野でさまざまな矛盾を抱えて生きる〈在日〉の暮らしが描かれている。

金時鐘の第四詩集となる『猪飼野詩集』は、『新鴻』が出版された年からは八年、実際に書かれた頃からは約二〇年の隔りがある。その間に金時鐘や〈在日〉を取り巻く状況は大きく変化した。金時鐘は一九七三年九月から、兵庫県立湊川高校で朝鮮語教師として教育に携わっている。金時鐘はそこで同胞の集落から切り取られ、日本人と見分けがたく散在する〈在日〉の姿を目の当たりにした。一九六五年に締結された韓日基本条約

によって、国籍の上でも〈在日〉が分断され、日本への帰化や風化も進み、そこには、多くの矛盾を孕みながらも共和国が祖国としての求心力を持っていた時代とは異なった〈在日〉の現状があった。また、一九七三年二月には、「猪飼野」の地名が消されている。「猪飼野」という在日朝鮮人の代名詞のような地名の為に、土地が安く買ひ叩かれ、結婚にも差し障るという理由から、隣接する町に併呑されたのだという。⁽¹¹⁾このような状況を背景に『猪飼野詩集』では、日本人に「見えない町」をいかに可視化するかという問題意識のもと、読者の五感に訴える生々しい言葉と激しいリズムによって〈在日〉の生活がうたわれる。

打ってやる。／打ってやる。／忙しいだけが／おまんまのあてさ。／かかあに ちびに／母に 妹だ。／口にたまる 釘の 汗を／吐いて 打って／打ちまくる。／／日当の五千元／かせぐにや／十足打って／四十円。／ひまな奴なら／計算せい！／／打って 運んで／積みあげて／家じゅうかかって 生きていく。／日本じゅうの ヒール底／叩いて 打って／めしにするのだ。 (二うた またひとつ) これは、ハイネの「シュレージエンの職工」のリフレイン、「古きドイツよ お前の帷子を織ってやる／三重の呪いを織りこんで／織ってやる 織ってやる」に触発されて書かれた詩であ

る。⁽¹²⁾ 細見和之は、民衆の呪いが理論化され、抽象的な印象を受けるハイネの詩に比べ、「『職工』たちの姿に、ヒール底を打ちつける同胞たちの姿を、リアリティをもつて重ねることができた」金時鐘の「うた またひとつ」は、翻つてハイネの詩に「民衆的な拡がり」を与えていると評している。金時鐘は、数をこなすことで生計を立てる〈在日〉の「打つてやる。／打つてやる。」のリズムに乗せて、そのような生活を強いる「日本というくに」、「おいてけぼりの／朝鮮」をも打ちつける。

・汚水が ゆけゆけの／ニワトリ長屋。／わけてもきたなかつたのは／いやに部厚い／唇の 叔父貴だ。／てかてか／日本のヨメさんまで飾りたて／とうとう／おれの叔母を追いだしたばかりか／朝鮮戦争で 逃げてきた／いとこの兄まで／突き出した。／ちきしょう！／チョウセンやめたは そのときよ。⁽¹³⁾

・イカイノどまりの 男と女が／三人ばかり 張り工かかえ／めつたやたら 働きつづけて／下請ながら 自立した／ものも つかの間／ベルトに巻き込まれて／あつけないくらい／あの人だけがいつてしまった。／それで また／ハルコは張り工に／六か月のおなかかかえて／逆戻り。

(うた ふたつ)

家族総出で回していく零細工場、生活の場に持ち込まれる祖国分断、政治組織との相克、法の網の目をかいくぐつての生活、忍びよる日本への同化……という矛盾にまみれた〈在日〉の生活史は、「日本と朝鮮のはさまで凝固した日日の重なり」に他ならない⁽¹⁴⁾ (あとがき)のである。

「寒ぼら」は、「なかおり」おっさんの／いわくを聞いた人は／まだいない。」で始まり、一世と思われる謎めいた人物について語られる。「なかおりおっさん」の口癖は「ヨボお／きいてくれやせえ／わしの刺網は／まだだれも上げてないんだ……」で、「みんながまねあう／お笑い草」となっている。この後、「いったいどんなことが／なかおりおっさんの帽子の中に／つまっているのか。」と、その「いわく」が明かされる。「こゝえて／濡れて／朔風に／ずきん ずきん／こめかみはらして／半日がかりの／網を張る。／ところがその夜／うむをいわさずやつてきたのが／家をも凍らせた／徴用だった。「船底だったので／どこの海をよぎったかも知らず」、日本に連れてこられた「なかおりおっさん」は炭坑で働かされ、解放後も故郷へ帰ることなく「炭塵ならぬバフの粉で／眼のふちのくまどりだけはつづいてゐる」。

詩は、「このなかおりおっさんのなにに／かかったのか。／夜

半。／イカイノ寒ぼらが／一匹。／時代もののオーバーの肩に／潮風の記憶に吹かれて／ぶらさがっている。」で終わる。ぼらは、海で生まれ、淡水に入つて成長したあと、秋には再び海に帰つていくという。海のない猪飼野にいる「寒ぼら」は、「なによりも／還暦といわれることを不吉がり／鎮海の海に帰るまではと／ひとりものの泣きをからめ」る「なかおりおっさん」に擬せられている。「わしの刺網は／まだだれも上げてないんだで……」が口癖の「なかおりおっさん」は、「韓国からの魚はいっさい／ご自分のものだと 言いはつてやまない」。日本に連れてこられたときから網を張つたままなのだから、自分の網には韓国中の魚がかかっているに違いないというのだろう。「なかおりおっさん」の言ひ分は滑稽なものである。しかし、「なかおりおっさん」の実感から吐き出されたこの言葉は、日本による「徴用」がなければ発せられることはないのであり、植民地主義的な歴史を呼びよせる。「なかおりおっさん」の言葉は、完全に的外しながらも、それを強いたものへの痛烈な批判となっているのである。

「長篇詩 猪飼野詩集」は、掲載誌の都合で読み切り連載として掲載されたが、「当初は長篇詩として試みられたもの」（あとがき）だった。『猪飼野詩集』は、「詩集」の形で読まれること

を意図して書かれた詩である。多様な民衆の存在は歴史から排除されてきたが、民衆は、権力の歴史から排除され続けることでその生の痕跡を刻んでいた。それは、一つ一つは取るに足らないものだが、積み重なることである力を持ち、ほとんど立ち向かうことが不可能に思われる歴史に打撃を加える力を持つ。金時鐘は、「伝説」という形をとつて無数の繰り言を個別の物語として掘り起こし、一つ一つの個別の物語を「詩集」の形に集約させることで国民の歴史に抗う共同体を描き出したのである。

II 金嬉老事件

『猪飼野詩集』が書かれた一九七〇年代、経済的には飽和状態になつていた日本人は、学生運動における内ゲバの過激化と、それが極点に達した浅間山荘事件・連合赤軍事件の悪夢のような衝撃によつて、急速に政治の場から遠のき、私の生活空間へと閉ざされていった。一方、分断された祖国と日本の間で抑圧を一身に受け、政治の力にますます翻弄される（在日）は、日本人の陰で鬱屈した感情をもて余していた。さらに、日本で生まれ育つた二世が七割を超え、その多くが祖国との繋がりを絶たれた日本社会で、「一世の「欠落体」¹¹として孤立感を深めていた。

一九七一年に行われた講演の中で、金時鐘は、駅のホームで

大量のスキー客に出くわした時の体験を次のように語っている。

無関心が絶対量となった中を、私は針で縫うように天に至らねばならない。それでいて、この群集は私を「朝鮮人」として識別できる触角だけは万全である。この時に感じる恐怖というものは理屈ではない。個としての朝鮮人が日本人の絶対量の中をかいくぐる時の恐怖、それは「私」という「個」が背負いこんだ絶対の恐怖であります。¹⁵

電車を待つスキー客がホームに溢れているという光景は、レジャーブームに湧いていた当時の日本ではありふれたものである。しかし金時鐘には、それが人間の集まりであるというよりは、「昆虫かなにかの蝟集」のような無気味なものに見えたという。金時鐘のイメージは戦時下の日本にまでさかのぼり、スキー客の「リュックサックはみるみる背囊になり変わり、林立したスキーは銃剣に早変わり」する。そして、「おまえ達の行くところはおそこだ」と車掌が指さす方向に、彼らは一斉に移動を開始するのである。金時鐘は「ただの量としてかたまつて時間を待っている」スキー客の姿に、いつ再び朝鮮人をおびやかす日本人に変貌して、一斉になだれ込むかしないという恐怖を感じとっている。金時鐘は、さらに「私はこの恐怖を、『日本人』に知らせる手だてを持ち合わせていません。知らせようがない

くらい、『日本人』と『朝鮮人』のコミュニケーションは原体験の端緒から食い違っているのです」と続けている。ここでは、過去の記憶と隣り合わせにおびえる金時鐘と、加害の記憶を忘却の淵へと追いやることで目覚ましい経済発展を遂げてきた日本人との間で、目に映る世界までが異なってしまうという深い断絶が示されている。

このような〈在日〉の鬱屈した感情を、「暴力」という極端な方法によってさらけ出したのが、金嬉老事件だった。日本で明治百年が祝われたその同じ年、〈在日〉二世の金嬉老がライフル銃と爆薬を手立てこもり、民族差別を告発するという事件が起こった。日本が一九六〇年の安保闘争の終結を境に政治の季節から経済の季節へと推移していき、世界第二位の経済大国へのの上がついていく絶頂期の、一九六八年二月のことである。

金嬉老は、植民地下の日本で苛烈な民族差別を受けながらも、皇国少年として育った。少年の金嬉老が頭に抱いていたのは「軍神となった西住小次郎戦車隊長、あるいは爆弾三勇士、西郷少佐、東郷平八郎、そういうふうな軍人、すなわち軍神といわれたそういう人たち」であり、日本の敗戦の日には「天皇陛下が泣いているその感情にふれて、私も涙をポロポロポロ出して泣いた」という金嬉老は、「朝鮮人だ朝鮮人だとみじめな思いを

させられながらも、自分の気持は朝鮮人ではなかった。もう日本人になりきっていた⁽¹⁷⁾。解放後も、民族差別から逃れるために努めて日本人らしく生きてきた金嬉老は、朝鮮名・日本名で八つの名前と、複数の生年月日を持っていた。金嬉老は自らを近代日本が産み落とした「奇型児」と呼んでいるが、金嬉老事件は、母国語を奪われ、日本語の暴力を打って返す言葉を持たない二世のあげた悲鳴だった。その積年の鬱屈した心情が、刑事に浴びせられた「てめえら朝鮮人は日本に来て、ロクなことしないで！」という言葉をきっかけに、「もうだめだ」という無力感と共に、暴力への衝動となつて噴出したのだ。しかし、「日本よ、私に母国のことばを返してくれ！日本よ！私に母国語の生活感情を返してくれ！」という金嬉老の叫びは、「日本社会には届かなかつた。金嬉老の死を賭けた告発は、「ライフル魔」金嬉老の犯罪行為として「恐怖」⁽¹⁸⁾という言葉で括られ、事件の収束と共に忘却されていったのである。

植民地主義的な紋切り型は、「他者を病に結びつける物語」を編み合わせるように生じる。内藤千珠子は、明治期の新聞報道に頻出し、生々しい存在感をもって記され続けた「アイヌ」や「閔妃」といった記号が、現在ではすっかり忘却されていることについて、「物語というシステム」に焦点を当てることで、その

記憶と忘却、物語の構造について考察を行っている⁽²⁰⁾。植民地主義的な言説では、不可解な他者を「病」と結び付ける物語によつて、その意味の空白を埋めようとする力が働く。「病」は様々な二項対立の中で劣位に置かれ、「病」を治療する者としての「われわれ」が正当化されていく。メディアの言語は、様々な対象を主人公にまつりあげ、物語の定型を生み出してきた。物語の主人公はやがて忘却され、あとには物語の主人公によつて代表された他者への漠然としたイメージだけが残る。そして、物語の主人公は次々と補填され、定型化した物語が再生産されていくのである。

金嬉老が逮捕された翌日の『読売新聞』（一九六八年二月二五日）には、「かれの行動に見られる異常なまでの自己顕示欲は、精神異常者あるいは精神病質者に特有のものであるが、これが狂暴性をともなつたときの危険さははかり知れない」という社説が掲載されている。これは、植民地下の「朝鮮人は非常に言葉が巧みでありまして、一種の天性だと吾々は思ふのでありますが、兎に角旨い事を言つて頼込むから能く内地人は騙される（中略）彼等の性癖と言ひますか、賭博癖が非常に、一種の性癖を為す程賭博が好きなのであります。それと盗癖であります⁽²¹⁾」という、「天性」「性癖」「盗癖」といった素質としてのマイナスイメー

ジと「朝鮮人」が意図的に結びつけられていった言説に通じるものである。

二世の作家である金鶴泳の小説「まなざしの壁」の一場面には金嬉老事件が登場するが、ここには、日本人から（在日）に向けられる「まなざし」を断ち切ることの困難さが示されている。

あのときほど、あのまなざしが日本全国に湧き上がり、一つの場所、一人の人間の上に注がれたことはかつてなかった（中略）金嬉老はいつたい、何を射ち落とそうとしたのだろう？ ——あのまなざしにほかならなかった。（中略）が、彼はそれを射落とせなかった。あのまなざしは、そんな生易しいものではない。切ればかえって二つに増え、さらに切ればまた四つに増え、それは、立ち向かえば向かうほど、かえってその量と密度を大きくしていくといったものである。

（金鶴泳「まなざしの壁」）

立ち向かえば向かうほどいつそう増幅されていく「まなざし」は、次の金嬉老事件に関する『朝日新聞』の記事からもうかがえる。

はじめ、金の言葉の中に、これまで彼が朝鮮人として日本で受けた差別への憤りを感じて、彼の犯行は別として、心

のいたみを感じた日本人も多かったはずである。だが、金がいるんならびとの説得に応ぜず、みずからの行為に酔ったようなフシや、英雄気どりが現れてくると、この事件のもつ一つの大きな意味が薄れかけた。

（天声人語／一九六八年二月二五日）

金嬉老が受けた民族差別に対して日本人が感じたという「心のいたみ」は、やがて民族差別を盾に「殺人を正当化することはできない」という「正しさ」によって、さらによじれを孕んだ「まなざし」へと変貌する。そして、「ライフル魔」と呼ばれた金嬉老と、「九人のサムライ」（『朝日新聞』／一九六八年二月二五日）・「特攻ナイン」（『毎日新聞』／一九六八年二月二五日）と呼ばれた警察との間に鮮やかに浮き上がった対立関係は、事件の忘却と共に「金嬉老」という固有名詞が消えうせることによって、犯罪者に限りなく近い朝鮮人対日本人という一般化された対立関係へと拡散していくことになるのである。

金嬉老事件は、この時期の（在日）が負っていた象徴的な問題として盛んに論じられてきた。金時鐘もまた、金嬉老の裁判に特別証人として出廷し、自身の問題と絡めながら金嬉老事件についていくつかのエッセイを書いている。そこで金時鐘は、「金嬉老ならずともそのような極端な行為にかりたてられる衝

動は、私自身の内部にも古くからうずいていたものであり、朝鮮人なら誰しもが持っているであろうところの、日本に対する感情そのものとしての共感⁽²¹⁾を示し、さらには「無教に存立する『金嬉老』の群落へ、『金嬉老』そのものを見分けがたく存立させてしまうアクティブさを、意志的のものとしてゆく創造性こそ問われるべきだ」と、一見暴力の連鎖を引き起こしかねないような論を展開している。

この無教の、見分けがたい「金嬉老」の跋扈、跳梁によって、日本の差別主義者たちは（意識しない意識をも含めて）、否応なく時と場合を選ばない不意の闖入者に遭遇するおびえを、日常不断に、朝鮮人、日本人の關係で認知せねばならない必然に迫られるだろう。（金時鐘「日本語のおびえ」）言葉が吐き出される裏には、その言葉を生ましめた記憶・感情の錯綜した層があるのであり、その言葉はとりもなおさず、常に記憶し、蓄えられてきたところの思想の露出にほかならない⁽²²⁾という。「私がすでに金嬉老である」という金時鐘の突き上げるような情念は、「まるで朝鮮人自身の劣性によって在日朝鮮人の歴史・現実がさもしだされていとも言いたげな、あらゆる蔑視罵倒を浴びせて顧みな⁽²³⁾」いような「日本人の意識であるとか、日本の為政者の誰それの発言」の記憶が生ましめる

ものであり、金時鐘にとって、「金嬉老が持ち得たあの爆薬だけが、言葉に魅せられた鹽啞者の渴えた表現行為のように美しかった」⁽²⁴⁾。

その上で金時鐘は、暴力を越える「創造性」として、金嬉老が暴力によらざるをえなかった表現行為を言葉の問題として引き継⁽²⁵⁾こうとするのである。

III 詩的言語がとりこぼしたもの

日本の植民地支配のただ中の一九二九年に朝鮮で生まれた金時鐘は、徹底した皇国少年として育った。金時鐘にとって「解放」の日は、「日本人」となることが全てであった今までの抛り所が崩壊する「回天」⁽²⁶⁾の日としてやってきた。金時鐘は、日本語の抒情によって今もなお「民族的には共同体験のはずの不幸な時代が、個別的には真冬の山あいの日溜まりのように、そこだけがひっそりと明るく色どられている」と感じている。だからこそ、「その手馴れた日本語」と向き合い、「雑多な俗性のだだ中において、まみれても垢じまない抒情をどうしても自分の日本語でもって発露する責務が、私にはある」のであり、それが「しがらんだ日本語からの、自分自身の解放」⁽²⁷⁾ともなるのだという。

金時鐘は、植民地下に教え込まれた日本語で表現することに
ついて、次のように述べている。

日本語で元手をとらないかぎり絶対日本語を捨てる気にな
らない。それはとりもおさず日本人に対する復讐のつも
りでいるし、復讐というのは敵対関係というんではなく、
民族的経験を日本語という広場でわかちあいたいという意
味の復讐です。⁽²⁹⁾

明治以降の近代国民国家の建設は、本来多様だった個々の
人々が一挙に国家の物語と結びつけられ、「日本人」となってい
く過程でもあった。それは、それぞれの日常をどこどのよう
に生きていたかという個別の生の痕跡を忘却に追いやることに
よって為されていった。だからこそ、「日本人」となるために忘
却された記憶を、一つ一つ個別の物語として掘り起こしてい
なければならぬ。それによって、金時鐘は異なる記憶として
の「民族的経験」を「日本語という広場」でわかちあおうとす
るのである。

金時鐘は、韓国の詩人、金芝河の詩精神に絡めて自身の詩想
を次のように述べている。

私は日本に住んでいるせいもあって、余儀なく日本語を使
っています。日本の美意識に醜を看て取る思想が果たし

てあったかどうか、私の持っている「日本語」ではちよつ
と思ひ当たるものがありません。私達が言う「詩」の中
は、詩の言葉がさも別にあるかのごとく、むしろ意識して
醜いと思われるものを払拭していった歴史だけが眼につ
てくるのです。⁽³⁰⁾

金時鐘は、「民衆のたくさんの思いが堆積しているにも関わ
らず、「詩」にはとうていならないと思われている思考の原野
へ移行し、掘り下げられる」ことによって、詩の言葉から疎外
されていった言葉を復権させる必要があるのだという。それは
いわば「詩」的な日本語に「醜」の思想を持ち込み、日本語で
表現しながら非日本語的世界を構築する行為にほかならない。

植民地の記憶が刻まれた日本語による表現を金時鐘が手放さ
ないのは、「国語」としての日本語の枠に収まりきれない多様な
日本語の存在を確信しているからである。国民を一つの価値に
統合しようとする為政者を辟易させるような雑多な言葉の集積
こそ、金時鐘が自身の日本語に賭ける表現なのである。金時鐘
の発する言葉は、近代日本が作り上げた国家のもとに否応なく
押し込められた「日本人」をも引き上げ、連なる。(在日)の詩
人金時鐘の言葉によって、ほとんど表現されてこなかった膨大
な量の人々のつぶやきのような声が引き上げられる。このよう

な詩人の言葉による報復行為は、近代日本の裂け目から無数の人々を救い上げ、共生へと導いていくだろう。だからこそ、金時鐘は植民地の記憶が刻まれた日本語を手放さず、またその一方で日本語の抒情に引きずられるわけにもいかないのである。

IV 死を想う（主体）

『猪飼野詩集』には、様々な（在日）の生活が描かれているが、詩集の終盤から、時間をさかのぼる形で民族の記憶と共に金時鐘固有の記憶が手繰りよせられていく。かつて金時鐘は、四・三事件⁽³⁾に関わり、虐殺を逃れて日本に密航してきた。「果てる在日（4）」には、「なにぶんとも遠い海のあちらで／ぼくの手の／とうてい及ばない韓国」で死んだ父が、「あのとき、ぼくは生産中でした。」と海を隔てて日本にいる金時鐘との対比の中で描かれている。「果てる在日（5）」では、朝鮮戦争という民族の受難に、「生きながら／ミイラとなった」母の姿が重ねられている。「夏がくる」と「影にかける」では、金時鐘の焦慮の根源にある八月一五日の記憶が描かれ、ここで金時鐘の日本語の起源が明かされる。皇国少年だった金時鐘は、朝鮮にいながら祖国の解放にも立ちあえなかつた。天地が揺れるほど解放の喜びに沸く民衆の熱気から離れ、金時鐘は一人、日本の歌を口ずさん

でいた。八月一五日の正午を境に、それまで信じてきたものが一変してしまつたのである。

『猪飼野詩集』の最後には、「夜」と「へだてる風景」が、（在日）の悲愁をこめた祈りのように置かれている。この二篇の詩によつて、「見えない町」猪飼野が、日本の中に厳然と存在する異郷として、日本人の目の前にたち現れるのだ。

祀られる夜を知るまい。／あどけない棘人の／ねむ気のような。／暮らしの底の／手のひらのような。／寝もやらぬ夜の／猪飼野を知るまい。／香木がくゆらす呪詛のような。／団らんによらぐ／灯明のような。／故郷を離れた祀りを知るまい。／寄り合うだけが支えのような。／死者のいない／追憶のような。／それでも焼かれた流浪を知るまい。／骨が怨んだ焼き場のような／猪飼野どまりの生涯を知るまい。／祀られる夜を君は知るまい。／夜更けて火照る猪飼野の／海へ帰す祈りを知るまい。／子どもが編んだ／笹舟のような。／ならわしにくすむ／呪文のような。

（夜二）

「夜」は、「祀られる夜を知るまい」と、日本人を問いたただすような形で始まるが、そのあと柔らかい調子になり、「くを知るまい。」「くのような。」というリズムが呪文のように繰り返さ

れる。一つ一つが混ざりあうことなく個でありながら、寄りあうようにして生き、共に死者を追想する。個は生きている限り報復を願ひ得る（主体）であるが、（死）は確實に個のすぐそばに常にあり、そのことが個を、（死）によって媒介される共生の道へと押し出していく。

猪飼野には、「焼かれる死の旅におびえながら、見果てぬ帰郷をそれでも焼いて煙りにした一世たちの、怨念めいた猪飼野焼き場（斎場）があった」という。『猪飼野詩集』には所々に煙のイメージが漂っているが、煙には焼かれて小さな骨壺に収まる一世の無念がこめられている。「憎しみばかりがこんなに多くて／齒ぎしりのままに／骨壺に収まって」（夏がくる）、「骨が泣くと／母が泣き／おやじは　ひっそり／棚の上よ。／かえせる土は／どこにあるやら／く／くがそんなに　遠いとは／ついで誰も　知らなんだ。／打って　たぐって／打ちまくる。／無念な　おやじを／打ちまくる。」（うた　またひとつ）と、金時鐘は、この世に恨みを残して灰になった一世たちを、骨壺の中で安らかに眠らせない。

金時鐘のエッセイによると、「春がすぎてくると、イカイノ一帯は法事に忙殺される。濟州島四・三事件や朝鮮戦争の死者がいつとよきにやってくるからである。犠牲者の縁族から殺した側

の縁類まで、軒を連ねて祀りがつづき、供物の料理が隣りどうして配られる」という。詩には、そのような背景について注は付されていず、「夜」の「祀り」にこのような歴史的事実にまつわる猪飼野の風景が描きこまれているということは、金時鐘のエッセイを読んではじめてわかることである。「夜」は、金時鐘がそこに書き込んだ金時鐘固有の記憶、猪飼野という特定の場所が喚起する記憶、（在日）の記憶といった諸々の固有の記憶とは違った形で、詩の言葉が丸ごと読者の中に居坐り、呪文のように反響する。そして、金時鐘の詩の言葉をしこりのように抱えた読者は、詩の言葉に託されたもう一つの意味——金時鐘が託した固有の記憶に思い至る時が来るのではないか。その時、改めて異なる記憶を持ったものとして、金時鐘と読者、（在日）と日本人が会おうのではないだろうか。

百済の里に／葦はなく／海が会った／河口も断たれた。
／掘りすすんだ水路を／集落がかかえ／ひしめいた泥の／地下足袋も／固い川床の／コンクリートの下だ。／蹴んだ運河に集落はとぎれ／川を求めた人たちの／行方を知らず
／運河だけが／地を割った末裔たちの／かたえで／黙る。³¹

平野運河のコンクリートの下には、かつて徴用された無数の

（へだてる風景）

朝鮮人の「地下足袋」が埋もれている。金時鐘が猪飼野を「船が埋もれてある街」⁽³⁵⁾と呼ぶように、彼らはいつかお迎えの船が運河をさかのぼって行くことを夢みながらその生涯を終えていった。そのかなわなかった願いの上に、「(在日)」の暮らしが、日々積み重なっていくのである。平野川には、平野川を切り開き、猪飼野を拓いた一世たちが埋もれている。平野川は、死者と生者が出会ふ場所である。生者は死者を追想し、死者の累積は生者の生きる根拠を支える。この生と死の連環が、澱んで流れない運河をゆっくりと海へ押し流していく。

『猪飼野詩集』は、二〇〇五年八月、『光州詩片』と共に新たに『境界の詩』(藤原書店)として再録されているが、『境界の詩』の出版インタビューで、金時鐘は次のように語っている。

岩盤のようなこの世に生きて、誰もがひっかき傷のような生の痕跡を残したいと思う。それが詩です。(中略) 詩人には、言葉にできないものを抱えて生きるその他大勢の人々の思いを表現する責務があります。私がつむぎ出す詩の言葉は個人の思いですが、大勢の人々に支えられたものでなければなりません。⁽³⁶⁾

金時鐘にとって『猪飼野詩集』は、「日本の詩の域外で喉を哽らしていた『他者』の生の痕跡」⁽³⁷⁾であった。国家の作り出す国

民の歴史を前にしてそれに取り込まれることにささやかに抗い、言葉に表現することなく消えていった多くの人々の存在。それが個としての記憶を持ち、互いにそれをいとおしみながら寄りそっているというそれぞれの個としての生と死。これが、金時鐘が『猪飼野詩集』で描き出した〈主体〉である。

金時鐘は、『猪飼野詩集』で、報復という独特の経路を経て、共生への道を切り開いていった。それは翻って、日本社会で〈在日〉が生きる上で直面する、抑圧を断ち切ることの困難さ、日本人との対話を図ることの困難さに向き合った詩人の、深い無力感に根ざしている。それでも〈在日〉が生きてきた記憶の伝達を願わざるを得なかった、一人の〈在日〉の詩人の格闘が刻まれた詩集として、『猪飼野詩集』はあるのではないだろうか。

〈在日〉の生の堆積に支えられた金時鐘の言葉は、日本人のもとへと届けられ、それぞれの固有の記憶はぶつかり合い、絡まり合う。金時鐘は日本語に縛られた存在であるが、一方では、日本語を内部から切り開き、新たな言葉を創り出す可能性に賭けた詩人でもあるのだ。

日本人と〈在日〉の手が触れ合う切れぎれの瞬間の、その無数の連続が、金時鐘のイメージする共生の姿である。

結び

昨今、人格崩壊、セーフティネットの崩壊と、一九七〇年代に〈在日〉が直面してきた現実が、成り立ちは異なりながら日本人に忍び寄りつつある。姜尚中は、このような状況を「日本国民の『在日化』」と称して次のように述べている。

「在日」が、セーフティネットなき時代を生きながら、やがて日本社会の中に埋め込まれ、「市民」や「住民」として生きていけるような可能性がみえてきたとき、逆に日本の平均的な国民が、あたかも「在日」的な境遇に近づきつつあるのだ。

うがって言えば、そうだからこそ、「在日」と「日本人」の境界を新たに目にみえる形で作り直す力が働くようになったのかもしれない。それは、多分にナシヨナリズムの気分を代表しており、「北朝鮮問題」に触発された「在日」パッシングの動きもそれと関連していると思える。³³⁾

近代以降、人々はおびただしい死者を忘却の淵に追いやってきた。そして、「企業や組合、地域や各種団体などを中核とする共同体意識がくずれ、同時に社会的なセーフティネットが、いろいろなところでほころびはじめるようになった」現代社会

において、人々は生きる根拠を失い、行き場もなく漂流しはじめている。ここでは、〈死〉によって媒介される他者とのつながりのルーツが完全に断ち切られているのである。その一方で、新たな国民の歴史が、分散された人々の拠り所として急浮上し、ナシヨナリズムの温床となりつつある。

金時鐘は、〈在日〉文学について次のように述べている。

私たちには好もうと好むまいと、いかに朝鮮から切りたいと思っていようと、宿業みたいに受け継がれている生理言語が体内にとどこおっている。この言葉を目的意識的に発掘できる表現者が、在日朝鮮人文学の創造者であると思う。その在日朝鮮人語を下地にして、「在日」することで損なわれたものが何で、その損なわれたものなから現に生まれつつあるものは何なのかを、見てとつていく営為が、私には「在日を生きる」ことの意味であり、課題なのだと思っている。³⁴⁾

〈在日〉の日々の生活の中では、その生活感覚に根ざした言葉が「生理言語」として受け継がれてきた。³⁵⁾それは、世代を継いで異郷で暮らしてきた〈在日〉の苦い笑いや悲愁が抱えられた言葉である。金時鐘は、〈在日〉文学はこの「在日朝鮮人語」を下地にして、日本語にも朝鮮語にもない「喩」を創り出せる可

能性をもっているものであり、そのことが、「第三世界につながる文学の目安」ともなるのだという。

個別の生の堆積との共生が、同じく抑圧された者としての悲しみにおいて繋がりが、報復へのエネルギーを増幅させる。それを支えるのが、(死)を背負って生き、生と共に生きる(死)である。これが、『新鴻』から『猪飼野詩集』にかけて最も顕著に変化した金時鐘の表現としてある。金時鐘にとつて、報復と共生は相対立するものではなく、相補うものとして存在しているのである。個々の生が根こそぎ奪われる極限状況をくぐり抜けてきた者の一人として、金時鐘の言葉は、「⁽¹⁾こういうことが、またあつてはなりません」という、素朴な祈りに到達する。それは、個々の生がおびやかされることへの怒りと、死者の記憶を刻みつけ、新たな生に受け渡したいという願いに支えられている。

(註)

(1) 金時鐘(座談会/金石範・金潤・竹田晋嗣・李恢成)「90年代の世界と『在日』を考える」(『民涛』/一九九〇年三月)

(2) 金時鐘『長篇詩集 新鴻』(一九七〇年八月/構造社)、『新鴻』が書かれた時期は証言によって食い違ひがあり、はっきりと分からないが、金時鐘によると一九五九年頃から書き始められ、一九六〇年頃に書き終えていたようである。当時、金時鐘は所

金時鐘の日本語表現 —— 『猪飼野詩集』を中心に ——

属していた在日朝鮮人運動組織から激しい批判を受けていた為、長い間出版できず、原稿のまま保管されていた。

(3) 浮島丸事件 一九四五年八月の解放直後、掃国を急ぐ朝鮮人の為に軍用船が輸送船に仕立てられ、釜山に向けて出港した。しかし、船は時限爆弾で爆破されて沈没し、五四九人が死亡、乗船者の半数以上が確認できない犠牲となった。また、一九四九年、舞鶴湾内に沈没していた浮島丸を引き揚げ、再生して使用したいという要望が旧所有者の大坂商船からなされた。引き揚げ作業にはダイナマイトも使われた。沈没後、浮島丸は九年間も放置されていたため、遺骨は海中で土砂に埋もれており、遺骨の収集作業は難航したという。

(4) 李静和は、「生と死はいつも一緒だった。近代以降、生だけがワーツと表に出してしまった。死というものはいかにも暗いものとして、隠さないといけないものになってしまった。もともと死と生は一緒になっていた。限られた生命のなかで限られた時間によって死んでいくのはあたりまえ。このあたりまえのことをどうやってあたりまえに迎えるか、これは近代では失敗したような気がする」と述べ、「死んだ魂と抱き合」うことの必要性を指摘している(対談/岡本厚)「難民・船・タンパから見つめる世界」/『世界』二〇〇二年七月/『求めの政治学』/二〇〇四年二月/岩波書店)。

(5) 「在日朝鮮人」の呼称には、現存する分断国家に配慮した言い方「在日韓国・朝鮮人」(在日コリアン)、また「在日韓国人」などがある。しかし、民族差別や分断イデオロギに引き裂かれた「朝鮮人」という呼称がもつマイナスイメージを受け止め、乗り越えるという問題意識を持つため、ここでは民族の総称として「朝鮮人」「在日朝鮮人」を使用する。

- (6) 連載時の題、掲載年月は以下の通り。「見えない町」(一九七五年二月)、「朝までの貌」(一九七五年五月)、「うた ひとつ」「うた ふたつ」(一九七五年八月)、「うた またひとつ」「イカイノ トケビ」(一九七五年十一月)、「寒ぼら」「日々の深みで(1)」「(一九七六年二月)、「日日の深みで(2)」「(一九七六年五月)、「朝鮮辛報」この届き去られる遺産」「日日の深みで(3)」「(一九七六年八月)、「果てる在日(1)」、「(2)」「(一九七六年十一月)、「果てる在日(3)」「(労働昇天※1)」、「(4)」「春の埋葬」、「(5)」「チノギの船※2)」「(一九七七年二月)、「いざる」「夏がくる」(一九七七年五月)。※1初出は『詩学』(一九六〇年八月/原題「労働昇天」)。※2詩集では、題が同じで異なる詩が収録されている。また、「果てる在日(5)」「(原題「にじる影」と「影にかける」は、『文芸展望』(一九七七年九月)に「夏二題」として掲載されている。
- (7) 「伝説」より「伝説」の方が物語という要素が強くなる為、金時鐘によって変えられたのではないかと考えられる。
- (8) 金賀江『異邦人は君ヶ代丸に乗って―朝鮮人街猪飼野の形成史―』(一九八五年八月/岩波新書)
- (9) 金石範「―在日朝鮮人の独白」(『朝日ジャーナル』/一九六九年二月一六日〜三月一六日) ↓ 『ことばの呪縛 ―在日朝鮮人文学』と日本語―/一九七二年七月/筑摩書房)
- (10) 詩集に収録される際に末尾に書き加えられた部分。
「『釜ヶ先』という地名が差別と結びつくという理由から『愛隣地区』に変更されたこと※引用者)同じような理由からであろう、『猪飼野』の町名、地名は地図の上からは抹消されてしまった。そして、桃谷町などの町名が猪飼野町にとって変
- (11) た(前掲『異邦人は君ヶ代丸に乗って―朝鮮人街猪飼野の形成史―』。また、『猪飼野詩集』の「あとがき」にも、「猪飼野」という在日朝鮮人の代名詞のような町の名が、周辺住民の民主的な総意によって書き換えられたのは、まさしくその奇異な村々の性のためでした。「イカイノ」と聞くだけで、地所が、家屋が、高騰一方のこの時節に安く買い叩かれるというのです。ひいては縁談にまで支障をきたしているとかで、隣接する「中川町、桃谷〇丁目」に併呑されてしまいました」とある。
- (12) 金時鐘は後に、「その打ちつけるリズムは私の体内で二十数年も脈搏を打ちつづけ、「うた またひとつ」という私の詩に息を吹きかけてくれた」と語っている(消えた『ハインネ』/『ハインネ散作品集』第二巻「序文」/一九九〇年/松籟社)『草むらの時』/一九七七年八月/海風社)。
- (13) 細見和之「ひとつのトライイリングル ハイネ、ツェラーン、金時鐘をめぐって」(『現代詩手帖』/二〇〇五年六月)
- (14) 姜尚中は、「わたしは学生時代まで、二世は一世の『欠落体』ではないかと思っていた。一世が持っているものをわたしは持ち合わせていなかったからだ」(第八章 東北アジアにもとに生きる)/『在日』/二〇〇四年三月/講談社)と述べている。
- (15) 金時鐘「朝鮮人の人間としての復元」(同志社大学神学部特別講座の講演記録/一九七一年一〇月一四日) ↓ 『在日』のはざままで/一九八六年五月/立風書房) ↓ 二〇〇一年三月/平凡社ライブラリー)
- (16) 例え(在日)二世の金若生が、選挙事務所の前で振られる日の丸の波を目にした途端、関東大震災で朝鮮人が虐殺された記憶を連想し、「また、殺される。また、こいつらに殺される」

- (17) 猪飼野にさえ日の丸は翻える／『季刊三千里』／一九七九年一月↓『わたしの猪飼野』／一九八二年一月／風媒社』という得体の知れない恐怖に襲われたと述べているように、(在日)に共有される感覚であるといえる。
- (18) 金嬉老『金嬉老の法廷陳述』(金嬉老公判対策委員会編／一九七〇年一月／三一書房)
- (19) 事件当時の新聞報道には、「恐怖」という言葉が目立つ。「…寸又峡温泉は、恐怖に息をひそめている」(『狂気のライフル魔』／『読売新聞』夕刊／一九六八年二月二日)、「こんな恐ろしい思いがいつまで続くのか―世にも凶悪な野獣のような男がつい目と鼻の先にいる。そして生れてはじめて見るほど大勢の警察官が来ているのに手も足もだせないのだ」(『恐怖高まる持久戦』／『朝日新聞』／一九六八年二月二日)、「…ギャング映画を地で行くような恐怖と戦いつにさらされた地元大開地区の人々は心臓の凍るような夜を、まんじりともせずにごした」(『恐怖の夜 つんざく銃声、マイト』／『毎日新聞』／一九六八年二月二日)。
- (20) 内藤千珠子『帝国と暗殺 ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』(二〇〇五年一〇月／新曜社)
- (21) 『朝鮮人問題』(司法省刑事局／一九二八年)↓(朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第一巻／一九七五年九月／三一書房)
- (22) 金鶴泳「まなざしの壁」(『文藝』／一九六九年一月)↓『凍える口』／一九七〇年七月／河出書房新社)↓『土の悲しみ 金鶴泳作品集Ⅱ』／二〇〇六年四月／クレイン)
- (23) 『毎日新聞』、『読売新聞』、『日本経済新聞』等で、金嬉老は「ライフル魔」と呼ばれている。

金時鐘の日本語表現 —— 『猪飼野詩集』を中心に——

- (24) 金時鐘「日本語のおびえ」(『朝鮮人』／一九七三年三月)↓(前掲『在日』のはざままで)
- (25) (24)に同じ。
- (26) 「私の報復というのはね、物理的なものじゃないなあ、日本語に、日本語の領域にない、つまり日本人のもたない日本語で日本人の意識に入り込めること(もしくは日本人の意識に打って返せたら、と言いたいのですが、それはおこがましいことですが、そういうことができたとき、私の報復は完成すると思っております」(金時鐘「対談」木庭宏)「ハインリヒ・ハイネについて」—金時鐘氏と語る—／『近代』／一九八七年八月)。
- (27) 金時鐘は、日本の敗戦(つまり朝鮮の解放)の日の衝撃を、「回天」という言葉で表現している。
- (28) 金時鐘「日本語の石笛」(『思想の科学』／一九九五年五月)↓『わが生と詩』／二〇〇四年一〇月／岩波書店)
- (29) 金時鐘(座談会／鄭仁・高亨天・犬塚昭夫・福中都生子)「在日朝鮮人と文学」詩誌『ジンダレ』『カリオン』他」(『前夜祭』一九七〇年五月)↓『座談 関西戦後史 大阪篇』／一九七五年六月／ポエトリ・センター)
- (30) 金時鐘「醜」を生きる思想 —金芝河の詩精神—(『連続シンポジウム・金芝河』講演録／一九七八年八月)↓『世界』(一九七九年八月)↓(前掲『在日』のはざままで)
- (31) 四・三事件 アメリカが南朝鮮分断国家樹立に向けた総選挙を実施しようとしたことに対し、南北分断を固定化するこの動きに朝鮮全土で反対運動が高まっていた。その流れの中、単独選挙に反対して一九四八年四月三日に済州島民が武装蜂起したことに端を発し、一九五六年九月までの武力鎮圧の過程で三万人を超える島民が虐殺された。この事件の悲惨さは、米軍を背

景とした警察・軍・右翼団体による虐殺だけではなく、追いつめられて不信にかられた武装隊による島民虐殺が行われたことにもある。さらにこの事件は密島で起こった「共產暴動」としてタブー視され、最近までその記憶が抹殺されていた。金時鐘は、この事件に南朝鮮労働党の党员として関わり、追われる身となり、一九四九年六月に日本に密航してきた。金時鐘は長い間この事件について固く口を閉ざしてきたが、二〇〇〇年四月一日に行われた講演「濟州島四・三事件と在日朝鮮人」ではじめて公の場で四・三事件の体験を語った(『図書新聞』/二〇〇〇年五月二七日に、「記憶せよ、和合せよ 濟州島四・三事件と私」として講演録が掲載されている)。

(32) 金時鐘「映像がかかえる言葉」(曹智絃『猪飼野——追憶の一九六〇年代』/二〇〇三年四月/新幹社)

(33) 金時鐘「猪飼野―無くてもある町」(『環』/二〇〇四年四月) 連載版では「見えない町」の後半部としてあったが、詩集に収録される際に「(だてる風景」として独立し、詩集の最後に置かれている。尚、詩集版「見えない町」の後半部は、前半部と同じリズムの詩が替わりに書き加えられている。

(35) 金時鐘「船が埋もれてある町―猪飼野雑感」(『辺境』/一九七二年三月) ↓ (井上光晴編『辺境レポート』/一九七五年三月/辺境社)

(36) 金時鐘「インタビュー」(『生の痕跡残したい』(『朝日新聞』夕刊/二〇〇五年二月二日)

(37) 金時鐘「あとがき」(『境界の詩』/二〇〇五年八月/藤原書店) 『猪飼野詩集』と『光州詩片』が再録されている。

(38) 姜尚中「第六章 社会的発言者へ」(前掲『在日』)

(39) 金時鐘(座談会/小田実・桐山興・中里喜昭・李恢成・李丞玉)

(40) 「在日文学と日本文学をめぐって」(『民済』/一九八八年九月) 金時鐘は、「漬物」と聞いてキムチの酸っぱさを思い浮かべ、「祭り」と聞いて「祭祀」を思い浮べるような(在日)の生理感覚を挙げている。また、「なまじっか丁寧語の『お』を付けたばかりに、卵を『オマンガ』として完り歩いた婦人の話、フトンとウドンを間違えて、夜通し『ウドン』を所望しつづけた日本に來たての男の話」や「漢字を読み取れない猪飼野のおばさんたちが、『終点』を言い換えて『ながーいノリケンイ(のりかえ)』と言っていた」(金時鐘「こぼれた話」/『海燕』/一九八六年六月) 『草むらの時』/一九九七年八月/海風社) という話など、(在日)の暮らしには滑稽な形態にくるまれた逸話が沢山ある。このように(在日)の生活の中で蓄えられてきた日本語を、金時鐘は「在日朝鮮人語」と呼んでいる。

(41) 金時鐘「濟州島四・三事件と在日朝鮮人」(31) 参照。

[付記]

※金時鐘の詩の引用は、『集成詩集 原野の詩 一九五五―一九八八』(一九九一年一月/立風書房)に拠った。

※改行には「/」を使用し、行間が空けられている箇所は「/ /」と記した。

※旧漢字は新字体に改め、仮名遣いはそのままとした。ルビや記号などは適宜省略した。

(あさみ ようこ) 本学大学院博士後期課程在学